

八戸藩武士家族法

一 はじめに

工 藤 祐 董

家族法はいわゆる私法の領域に属するものであるが、將軍および大名がその家臣に対して絶対的とも言える支配権を確立した幕藩期には、家臣の相続・養子・婚姻等に関しても、主君はこれを家臣の任意に委ねる事なく、家臣統制の手段として利用するに至った。家臣の相続・養子・婚姻等は、中田薫「徳川時代の養子法」にあるように、いずれも家臣に取って重要問題であるだけではなく、主家にとつても重要な利害関係のある主家自身の問題であり忠誠且有能な家臣団を維持するために、主君がこれ等の事項を統制し法的規制を加えるのは必然的である。相続・養子・婚姻がすべて家臣の願出に対する主君の仰付の形すなわち許可制となっているのはこの為であり、従つて武士家族法は単に私法の領域にとどまるものではなく家臣統制法令としての性格が強い。鎌田浩教授は「まさにこのような家臣統制手段としての家族法という点こそが武士家族法のすべてをいろどる基調をなしているのである……」と指摘されているが、武士家族法に特有の性格を明確に示されたものである。このような家臣統制手段としての性格から、武士家族法の基本原則として作用するのは「主君の利益重視」と言うことである。

また幕藩期の社会は身分階層制に基く社会体制であり、身分階層制の維持は幕藩期社会において必然的に要請されるところである。家臣団の構成も身分階層制に基いており、「身分階層制の維持」は武士家族法にも投影する第二の基本原則であると考えられる。

八戸藩武士家族法は史料の制約からその初期については良く判らないが、寛延以降については比較的史料が多い。概して言えばはじめは藩独自の法令も見られるが、時代が進むにつれて幕府法に接近し同化されていった状況が史料に見られる。

本稿では引用文献中の明らかに誤記と見られる字句は訂正し、「エヌ」は「事」に、「ハ」は「より」に、「カ」は「候」に改めた。

註 (1) 中田 薫 『法制史論集』第一巻、三七五頁

(2) 鎌田 浩 『幕藩体制における武士家族法』二頁

二 相続法

I 相続保障、相続対象

幕藩期には大名とその家臣との間の封関係は封祿的知行制と称すべ

きものに變質して⁽³⁾おり大名権力の強化に伴ない、家臣である武士には主君から支給される封祿と屋敷の保有以外に原則として土地の私有は認められなかった。また家臣は封祿の処分を禁止され、封祿は主君が任意に左右できるものであった。封祿は家臣の奉公忠誠を期待して主君から家臣に恩給される一身専属的なものであり、本来世襲的に相続される筋合のものではなく、家臣たる武士には相続権は無い。したがって幕府法・藩法において封祿の相続と称しているのは、家臣の願出に対する封祿の再給に外ならない。幕藩期には武士の封祿は家督と呼ばれたが、被相続人または相続人はこの家督に対する相続願出権を認められていたと言う事ができよう。

1. 相続保障

しかし幕府法では寛永十九年に世祿制を採用し⁽⁴⁾諸藩でも初期には相続に際して封祿を削減する減知制を取っていたが、身分階層的秩序の整備固定化に応じて中期以降はほとんど世祿制を取っている。⁽⁵⁾八戸藩では特殊な場合を除いて、「勤功帳」「御家中系譜書上」等を参照しても、世減制等の一般的減知制が取られた形跡はなく、藩創設以来慣習的に世祿化が進み相続が保障されてきたものとみなされる。この背景としては、當藩家臣団の構成が大部分譜代・準譜代の者から成り主従関係が緊密であった事、家臣の禄高が当初から一般的に低祿で削減の余地が少なかった事、藩創立年代が幕藩的秩序が固定化しつつあった寛文年間であつた事等が考えられる。このような背景のもとに當藩では相続にあたり「親跡式無相違被仰付」事⁽⁶⁾を期待できるのが普通であり、いわば相続期待権⁽⁷⁾が家臣にあつたと言う事ができ、世祿制のもとでは

封祿の再給と言う形式が取られていても、實質的には封祿の相続が行われていたと見做される。ただし家臣に奉公義務に反する事や罪蹟等がある場合には封祿を削減され或は没収（改易）された事例は當藩の「勤功帳」「御家中系譜書上」にも散見され、封祿の処分は主君の裁量に属するものである事を示しているが、このような事はどちらかと言えば例外的な事であり、奉公義務違反や武士の品位をけがす犯罪とか品行の事実があり奉公の適格を欠くに至つた場合、その事柄の軽重に応じて封祿の削減ないし改易の処分がなされたのである。このような事蹟が無い限り、家臣はその封祿の相続を期待できたのである。然しながら封祿を没収する最も重い処分である改易についても、當藩では一旦形式的には改易処分⁽⁸⁾に付しながら、情状を酌量してその本人または倅を新規召出の形を取り救済している例や「改易御免」の事例が幾多もあり、改易処分も形式化しているのが見られる。以上の事から本来絶対的な性格を有する主君の家臣の封祿に対する処分権も、無制限且恣意的に行使されたとは思われず、その行使には藩政展開過程のなかで成立した慣習的な限界ないしは制約があつたと推定される。それがいわゆる主君対家臣の力関係によるものか、伝統的主従関係に基づく主従の情誼から発する主君の自己抑制によるものかは俄に断定できないが、前者もある程度考慮されなければならないとしても後者による所も大であつたと考えられる。⁽⁹⁾また極めて狭い範囲の家中で婚姻・養子・役職勤務等に由来する縁故関係が幹部家臣層と一般家臣層との間にも網の目の如く張り廻らされており、一方官僚機構の整備に伴ない幹部家臣層が藩政の実権を掌握し、更に幹部家臣層には主君と特殊な

縁故関係を有する者が少なからずあつた事を考え合せると、主君と家臣特に幹部家臣との間及び幹部家臣層と一般家臣層との間の縁故関係に由来する情誼ないしは恩情的配慮も、當藩のいわば慣習的な相統保障の背後にあつたのではないかと思われる。

註 (3) 大竹 秀男「相統法の歴史」二八頁（『講座家族』5）

(4) 「御当家令條」二九三（『近世法制史料叢書』2）

(5) 鎌田 浩『幕藩体制における武士相統法』（成文堂）

一〇五頁以下

(6) 「勤功帳」等に記録されている相統についての文言である。

(7) 鎌田 浩「近世武士相統法の特徴」（法制史研究13）に

おいて同教授は、相統期待権・相統期待性の語を用いている。

(8) 「藩日記」宝暦二年二月二日の項に次の記事があるのがその一例である。

「一西久保弥五郎儀先達而無調法有之身帶被召上候処年老迄御奉公筋無懈怠相動候趣達御聴右勤功被為思召此度新規被召出八駄式人扶持被成下旨御手札を以於御席被仰渡尤御目付先立親類中里甚之丞同道麻上下ニ而罷出

一右ニ付先達而妻子共江被成下候三人扶持指上候様被仰付御目付申渡」

(9) 『八戸藩史料』四六〇頁、四六一頁

天明の大飢饉に際して半知を実施するに当り家老が家中一同に演舌した中に「……若し果して然りとせば上御経済は勿

論御公務までも多大の支障を生じ御家臣御扶助の道も絶えんか依ては此際御家臣御減少も為さるべき御場合なれども各々は世々曹功の御普代なれば其儀にも至られ難く殊に本年一同の家計如何あらんと深く御憂慮有せらるると雖も上に於ても目下の御困難を他に救済の道無之を以て萬止むを得給わず当分の内禄高の半額貸上を命ぜらるるを以て……」と伝統的主従関係の情誼に基づく恩情主義を強調している例等から推定される。

2. 相 統 対 象

主君に対する奉公義務の反対給付として武士に恩給される封禄は、幕藩期には家督と称されたが、封禄は武士の家の存立の基礎をなすものであつた。すなわち封禄の恩給によつて武士の家は興り、封禄の召上により家は断絶し、封禄の再給により家は再興された。幕府・諸藩において、年代の差はあつても、或は法令により或は慣習により相統保障が一般化するに及んで封禄は世封家禄と称されるに至り、明瞭に相統対象として意識される事になる。基礎的な相統觀念については先学の諸説があるが¹⁰⁾封禄相統、家名相統、家業相統、祭礼相統等の諸觀念のうちで、武士の相統において相統の対象として最も強く意識される重視されたのは、家の存立にかかわる封禄であると解される。武士身分の相統の本質は封禄相統であり、家名・家業等の觀念が強く存在した事は事実であるが、これ等の承継は封禄の相統を前提として行なわれるものであり、家名・家業の承継は封禄相統に附随したと見なされる。祭礼相統の觀念も中田薫博士の説かれた如く「倫理的宗教的觀念

たるに止まり、法律上相統の要素をなした事はない」⁽¹¹⁾のであり、また祖先の祭祀を重視する事は武士・庶民を問わないところであり、武士に固有の相統対象と言う訳ではない。

註 10 鎌田 浩「近世武士相統法の特徴」(法制史研究 13)

二〇頁

(11) 中田 薫「徳川時代の家督相統法」(『法制史論集』
第一巻、四九七頁)

II 相統法の基本原則

中田薫博士は徳川幕府法における封禄相統の特色として、一、封禄相統と家名相統の結合、二、主君の利益の重視、三、血統の順位の重視、四、処分遺言相統の消滅、の四つをあげられたが、一は相統の主対象としての封禄相統の重視であり、二は家臣の封的勤務すなわち奉公義務の重視であり、三はいわゆる筋目の重視尊重であり、四は家臣の封禄処分権の喪失、それと表裏の関係にある相統許可制を意味する。相統許可制は家臣統制の有力な手段であり、主君はこの許可制を背景として、家臣の奉公忠誠を期待して封禄を恩給し、有能な家臣団の維持を図った。一方家臣の側から見れば、封禄は家の存立と奉公の基礎をなすものであり、相統保障が確保された段階では既得権化して世封家禄と称されるに至る。以上のことから、武士相統に対する法的規制の基本原理として最も強く作用するのは、前記中田博士のあげられた四点のうちで、第一は二の主君の利益重視の原理であり、第二の基本原理は自然的血統の順序重視すなわち筋目尊重である。これは身分階

層的秩序の維持固定化が幕藩体制の基礎をなしている事による。相統適格者を嫡出長男子に一応限定し、その権威を高めることは身分固定化の要請に即するものであり、また奉公能力を重視する主君の側からすれば、一般的に嫡出長男子が奉公能力を具備するのが最も早く血統的にも適正であると推定される。したがって筋目尊重は身分階層的秩序の維持固定の要請と主君の利益とが複合した副次的な原理として武士相統法に反映される。

註 12 中田薫「徳川時代の家督相統法」(『法制史論集』第一巻
四九二頁―五〇二頁)

III 相 統 人

1. 嫡子の種類

相統人は嫡子または惣領と称された。これを種別すると、法定嫡子(生得嫡子)、届出嫡子、願出嫡子の三種となる事は幕府法と同様である。嫡子の身分は出生届をする事によって取得されたが、身体虚弱等の理由で出生の届出をしなかった場合は、後日丈夫に成長した事を届出る「丈夫届」をして救済できた。⁽¹³⁾法定嫡子とは嫡出長男子で出生届がなされたものであり、筋目尊重の原則から、嫡出長男子が嫡子となるのが普通であり、生得嫡子とも称された所以である。妾腹の男子がさきに出生した場合は、将来嫡出長男子出生の際にはその妾腹子を次男に改める旨を付記して出生の届出をし、嫡出男子が出生しない場合にはその妾腹子を嫡子とする事ができた。これが届出嫡子である。⁽¹⁴⁾また嫡子の死亡または病身・虚弱・不行跡等を理由とする廃嫡により

次男以下は当然には嫡子とならず、原則として嫡庶長幼の血統の自然の順序に従って、被相続人が嫡子を選定し願出ることが必要である。⁽¹⁵⁾なお筋目の尊重は次の嫡孫承祖にも見られる。

2. 嫡孫承祖

嫡子が早世または廃嫡された際、嫡子に男子がある場合には、被相続人は嫡庶長幼の順序に従い、孫を相続人に願出るのが嫡孫承祖制であるが、幕府法上では「宝暦五年までは、祖父が嫡孫を跡式相続人に選定する場合に、猶古来の慣例に従て、これを養子に願出づる者もあつたが、同年十二月の令は、右の場合には嫡孫養子の願出に代ゆるに嫡孫承祖の願出を以てすべきことを命じた」⁽¹⁶⁾のであるが、當藩においても、このような幕府法の改正に應じて、嫡孫養子を嫡孫承祖に改めた事を示す次の記録が「古今例抜集」に見られる。

「寛政十一未四月十五日」

一 嫡孫承祖之者家督被仰付候節茂親或ハ亡夫家督又跡式ト被仰付候處坂本作三郎嫡孫勘之丞被仰付候節吟味致候事」

嫡孫承祖の際の申渡の形式について、當藩で法令業務を管掌していた目付が吟味を遂げたものであるが、「御家中系譜書上」坂本家の項を参照すると申渡の形式は変っていない。

3. 実子届

江戸勤番の際は五歳以上の御目見前の実子があれば、実子届を提出する事により、これを一応相続人を選定し、被相続人が勤番中死亡した場合に備える事ができた。この場合の実子とは何等かの事情で出生の届出をしていないものであり、妾腹子も含まれる。⁽¹⁷⁾実子届について

は、延享四年六月の次の「被仰出」が「例書 巽、養子養女仮養子願之事」三にあげられている。「一以来仮養子印形申上候筈且又御目見無之実子も登ニ付御届之節以印形申上候様表御勝手江被仰出候事、當時実子届御目見前ニ而も印形無之事、実子届ハ五歳以上仮養子者七歳以上申上来候事」とある。長男が病弱の為勤番登に際し後顧の憂を無くする為次男について実子届を提出しながら、長男について、御目見までに全快したならば嫡子に願上る事を留保している事例もある。⁽¹⁸⁾この場合は長男については、後日丈夫届を差出すことにより救済されると考えられる。したがって本例の実子届がなされた次男の地位は仮嫡子の如きものである。実子届は、勤番登の際相続人不存在に対する救済手段で幕府法には見られない。

註(13) 「例書、巽」等の事例の中に丈夫届についての記載が見られる。

(14) 妾腹男子が嫡出男子より先に出生した場合の両者の関係について、宝暦三年の幕府触（『徳川禁令考』、前集第四、二三〇一、宝暦三酉年十月廿三日「妾腹之男子養子願之義ニ付御書付」）があるが、「例書」にも転載され當藩法令が幕府法に準じている事を示している。

宝暦三年十二月「一妾腹ニ男子出生以後妻ニ男子出生致右妾腹之男子を次男与致置候者右次男年増候共弟ニ相立置候義ニ候間兄之養子ニ相願候義不苦候右之外年増之者并年増ニ無之候而モ伯父之統等有之候得者唯今迄之通相続可相願候右従公義被仰出」（「例書、巽、養子養女仮養子願之事」）

(15) 「諸願并届書案文」の「堅紙願」の中に「嫡子病身次男嫡子願之書」の案文が示されており、支配頭を通じて願出る事になつてゐる。

(16) 中田薫『法制史論集』第一卷三八六頁

(17) 後記養子法、「例書、異、養子養女仮養子願之事」四八、寛政十二年十二月七日例参照

(18) 「古今例拔集」寛政二年正月廿四日「実子届一男卯太郎申上右之兄病身ニ付若御目見申上候迄全快相成候ハ、猶申上度候旨口上書申上置候」とある。

4. 相統 欠 格

幕府法上嫡子または嫡子順位者が法的に当然其資格を失うのは、出家した時、他家の養子となつた時、父より久離された時、父母のいづれかが出奔した時、重罪を犯し處罰された時、養子離縁後に出生の実子等があげられるが、⁽¹⁹⁾当藩でもこれに準じていると推定される。たとえば、父母が出奔した場合、其子は家督相統も他家へ養子に遣わす事も宝暦九年まで幕府法令で禁止されていたが、⁽²⁰⁾宝暦九年十一月の幕府法令は母出奔の場合はこの禁を解いた。この事についても、當藩では幕府法の改正に応じた改正をした事を示唆する記録が「古今例拔集」にある。次がその記録である。

「宝暦九卯十二月大目付御廻状ニ而

一母致出奔其子家督并養子願不相成趣先達而被仰出候処以来不苦趣従公儀被仰出候事」

また養子を離縁した場合に、その養父の実子には相統資格がない事についても幕府法に準じてゐる。これを示す「例書、異、養子養女仮養子願之事」廿五、享保十九年五月の法令は以下の通りである。「一養子致候者若養子を返候義有之時最前致養子候以後実子出生候共其実子家督被仰付間敷候又養子を可奉願候然共右返候養子行跡惡鋪品有之候歟又ハ病氣ニ而決而御奉公難相成儀ニ相極養子返候ハ、頭支配得与間届実子江も相尋無相違候ハ、其品申上頭支配より実子を家督ニ可奉願輕病又ハ養子を心ニ叶不申候一通之儀迄ニ而養子返候跡ハ実子家督被仰付間敷候但御奉公仰付間敷との義ニハ無之候分地奉願候歟養子坏ニ遣候義ハ可為勝手次第候」

註 (19) 中田薫「徳川時代の家督相統法」(『法制史論集』第一卷、

五二五頁)

(20) 『徳川禁令考』前集第四、二二九八

(5) 相統と御目見

嫡子が相統するについては、原則として主君へ御目見がすんでいる事が要件とされた。これは相統人が相統に際して奉公能力を具えている事が原則として要求されたからであり、したがって幕藩期の成年である十五歳に達した時御目見願を提出できた。⁽²¹⁾この事も主君の利益重視の一つの現われである。しかし臨戦体制を取る必要も無くなり、家臣の奉公と言っても平時の官僚的業務と化した幕藩期ではこの要件は緩和され、十五歳以前の幼少者にも相統が認められたが、奉公不可能

の代償として幼少金を賦課された。⁽²²⁾

註 (21) 『八戸藩史料』三四五頁―三四六頁

「寛延二年己六月廿八日

一嫡子御目見願之次第左之通被仰出

一御給人嫡子 御目見願之義年十五歳ニ至候ハ、可相願候

右以前者相控可申事

一前之通急而支配頭江召連為見置候上相願御家老中へ内見

可為致置候様可仕候尤右之節支配頭同道可能出候事

一江戸勤番其外遠處御用罷越候面々未支配頭江茂為見置不

申候ハ、右之通可仕事

一大病之族嫡子未支配頭江茂為見置不申候ハ、親類同道為

見置可申事

一表御勝手御役人ハ公儀以萬端制外之事ニ候得者相願候而

も不苦候得共一統江仰出候義故自分より十五歳以前者遠

慮可仕事

右之趣御家中一統江被仰出」

右の法令によると、主君へ御目見できるのは十五歳であるが、

江戸勤番とか大病の際は十五歳以前でも支配頭と家老へ内見
させて置けばよかった事が判る。

(22)

『八戸藩史料』三五五頁、幼少金に関する規定「一知行取之
面々幼少金十四歳迄は一ヶ年百石五兩積にて差上申候筈十五
歳より御奉公相勤候ニ付幼少金御用捨之筈御目付より相改申
候筈」

IV 相統の開始原因

相統の開始原因は被相統人の死亡もしくは隠居である。隠居には二種類あり、其一は任意隠居であるが、病氣により奉公できない事を理由とするものと、勤仕が長期に及び老齡の故を願出て「首尾能隠居被仰付」ものとに区別される。其二是無調法・不品行・罪愆等により「隠居被仰付」ところの強制隠居であり、「古今例抜集」其他の史料に散見される。「首尾能隠居被仰付」の年齢の標準は明確ではないが、勤仕五十以上の者に隠居を許した時は褒美を下さる慣例である事等から、十五歳から勤仕するとすれば六十五歳が一応の標準ではないかと思われる。

番士は禄高五十石以上の場合、蔵米や金成でも石高表示の者は「隠居被仰付被下度」と隠居願を差出し許可を受け家督相統を仰付られ、封禄が金成十兩・蔵米二十五駄（共に石高に換算すると五十石）以上でも、石高表示でない無高番士と、それよりも下の家格である給人以下は「悴被召使被下度」とだけ願上る定めであった。⁽²³⁾願書の形式の差はあるが、隠居願に対する家督相統の申渡の形式は禄高五十石以上の者に対しては「家督被仰付」、被相統人死亡による相統の場合は「亡父遺跡被仰付」と達し、無高番士以下の場合、隠居による相統には「番代被仰出親跡式被成下」、死亡による場合は「番代被仰出亡父跡式被成下」と定められ相統を認められている点では変りはない。⁽²⁴⁾

足輕には譜代足輕と非譜代足輕の二種があるが、足輕は本来一代限りの奉公が原則であり、家督相統は無い筈であるが、実質は「悴召出」によって相統が行われた。

九代藩主信順の弘化四年には、隠居願は五十石以上は支配頭を通じて許可し、無高番士と給人は支配頭限で承認する事に改められた。後者は相統許可制が幕末期には形骸化した事を示すものである。⁽²⁵⁾

註⁽²³⁾ 「古今例抜集」四丁、御家中隠居家督之事、寛延二年巳十

二月十二日「御番士隠居願上候節百石以上五十石迄ハ御蔵米金成共ニ地形並ハ隠居被仰付被下度旨可申上候尤拾両以上式拾五駄以上ニ而も高ニ不仰付族ハ悴被召使被成下度与計可申上候右御番頭御用人御目付江御沙汰之事」

⁽²⁴⁾ 「御家中系譜書上」、「勤功帳」による。

⁽²⁵⁾ 『八戸藩史料』六二一頁

V 特殊な相統

1. 父子双方が別個に封禄を受けている場合

父子双方が奉公しそれぞれ独自に封禄を受けている場合は、父之封禄を子が相統すれば子の封禄は収公された。⁽²⁶⁾

2. 名跡相統

相統人不存在、無調法、不品行、非義等の事由により改易された場合、旧功の家柄や主家と特殊関係のある家柄等であれば、改易後に新規に封禄を授与し名跡相統を命じている例もある。⁽²⁷⁾ 主君の恩命による絶家再興によって、旧功由緒の家柄を維持させる事は、その祖先の遺風を表彰し主従の結合に資するもので、主君の利益につながるものである。

3. 分知 (分割相統)

幕藩初期には諸藩において分知も比較的多く見られたが、封禄加増が一般に困難となった中期以後は、分知は減少し単独相統が一般化した。分知とは封禄を嫡子以外の次三男等に分配する事であるが、幕府法では別御朱印頂戴の分知と別御朱印頂戴なき分知(内分)を区別し、前者では分家から本家の相統人を立て、分家自身も分家の他の子息、他に子息のない時は養子相統もできたが、後者では分家からの養子が本家を相統し、分家の相統人がなくなっても養子をする事は認められず、分知された封禄を本家に返還しなければならない。⁽²⁸⁾

当藩でも分知の例は存在し、⁽²⁹⁾ 初期には、主君の内意を伺わず分知を願出て改易された事例があり、家臣が封禄の任意処分権を喪失し、分知も主君の許可によるものであった事を示している。

当藩では分家を附庸として取扱っているが、これは幕府法の内分に相当する。

註⁽²⁶⁾ 『八戸藩史料』三五一頁「御切符御切米下附規則」に「一父

子勤之族父之身帯相統之節子へ被成下候身帶上り申筈」とあるが、子が父の身帯を相統しない場合については触れていない。幕府法では父子の禄高が同高の際、父は相統願を差出さない慣例であり、子の禄高が父にまさる時は、子は父の家督相統人を辞退して別に一家を分立できる(中田薫「徳川時代の家督相統法」『法制史論集』第一巻、四九三頁―四九七頁)。

⁽²⁷⁾ 『八戸藩史料』享保十六年十二月五日、川口幸助幼年にて相

続人なく病死、改易となったが、同十一日旧功の家柄を理由に新知七十石を賜い名跡を立てた例、その他寛延三年二月晦日木幡家、同年三月廿一日重茂家の例等がある。

(28) 『徳川禁令考』前集第四、二二六一「跡目之儀被仰下」、同前集第四、二二七三「分家より本家を相続致時之定」

(29) 「古今例抜集」、「附庸願之事」、延享元年子十一月「一分地遣候附庸之者致早世跡式不相立者本家江分地之高御返可被成候但附庸之者無調法有之改易被仰付候へ上江御取上本家へ御返不被成候事、右ハ公儀御定法之趣を以被仰出

宝暦元年未

一川勝文右衛門次男弁五郎五拾石分地願之通被仰付候事

明和五年子正月廿七日

一附庸之者家督被仰付候節本家之者御受之義相窺候処以来申上候様ニ被仰付右者宗利右衛門家督之節首弥一兵衛伺之上本家七兵衛へ申達

一川勝儀右衛門御用人役被仰付候節本家川勝文右衛門御受可申上候哉相伺候処不及申上旨御沙汰」

三 養子法

幕藩期には養子の語は男子について用いられ、女子については養女と呼ばれた。武家法では、養子は家督相続を目的とする養子即遺蹟相続の養子あるいは家督相続の養子と、家督相続を目的としない養子に大別され、前者には更に通例の養子、掣養子、順養子、末期養子、仮

養子、心当養子等の種別がある。後者としては分知配当の養子があるが、幕府法では文化以後はこれを認めなかった。以上各種養子のうちこの稿では通例の養子、末期養子、仮養子を中心として述べる。なお当藩においては、心当養子、分知配当の養子に該当する規定も事例もない。

I 通例の養子

通例の養子は特殊形態の養子である掣養子、出願の時期や手続が特殊な末期養子、仮養子に対して普通の養子を意味し、通例の養子についての法的規制は他の各種養子にも適用される。

1 形式的要件

養子についても許可制が取られているので、家臣の養子願出に対する主君の聞届仰付が必要である。養子願出は養方・実方双方より願書を支配頭に差出し、⁽³⁰⁾支配頭から家老席へ差出される。差出された願書は目付によって吟味された後、家老から支配頭を経て許可・不許可の申渡がなされる。養子取組について疑義がある場合は、願書差出に先立って内分伺を出し、内々の御沙汰を得た後に願を差出す慣例であった。明和五年の法令では、養父・養子となるべきものの統を書いた別紙を願書に添える事を命じている。⁽³¹⁾養子願の形式は当藩でもっとも重要な願の形式である堅紙願である。

註 (30) 上杉修氏文書「諸願并届書案文」等によれば、當藩では各種願届の形式は三種類あり、養子・相続・番代等、家の存続

継承に関する願は重き願である堅紙願を以てし、出家・湯治

・養女の願、欠落届・内分伺等口上の記載を要するものは口上書願・届を以てし、縁組・名改の願等は軽き願である手札願による定めである。手札願に属するものは定例的・儀礼的・形式的事項に関するものである。

養子願については同書、堅紙願目録の中に「養子双方願之事」、「急養子双方願之事」と記載され書式も掲げられている。

³¹⁾ 本稿、養子となる者の資格の項参照

2 実質的要件

幕府法に準じている事は「例書、異、養子養女仮養子願之事」十六に天和三年武家諸法度の養子に関する箇条が「御法令ニ有之」として記載されている事からも推知される³²⁾「例書」に「御法令」とあるのは通例幕府法令を意味する。なお以下幕府養子法については中田薫「徳川時代の養子法」(『法制史論集』第一巻)に詳しいのでこれによる。

(1) 養父となる者の資格

(ア) 封祿相続が可能な身分に属すること

幕府法と同様である。当藩で封祿相続が可能な身分は「家柄」と称される番頭・番頭並・者頭・者頭格等の最上層家臣、平土と称される番士(騎士格)、給人(諸職下役を担当する階層で盛岡藩の給人と異なり土着性がなく城下に集住させられていた)、医師、さらに軽い身分階層である馬方、勘定方までである。以上は「勤功帳」、「御家中系譜書上」の記載から知る事ができる。

足輕は本来一代限りの奉公であるが、相続法において前記したよ

うに、「忤被召使度」と願出る事により事実上相続が行われており、養子も可能であった。³³⁾

(イ) 年齢制限

前記武家諸法度によると五十歳以上十七歳以下は養子をする事ができない原則であるが、實際上幕府法では養子をする事ができるのは三十歳以上とされたのに対し、当藩では寛保期に普通四十歳以上とされていた。³⁴⁾これは当藩と始祖を同じくする盛岡藩と共通する。³⁵⁾

また五十歳以上、十七歳以下は養子を認めないとする原則は當藩でも同様であるが、幕府法でも特別の恩典として十七歳未満の者の養子願を許可した場合もあり、当藩にも十七歳未満で急養子(末期養子)を認められた特例があり、次にあげる。

「例書、異、養子養女仮養子願之事」五四

「嘉永二丙七月九日

一中尾銀次郎十七才未滿縁組願も不相済太病之処弟鍼五郎當丙十四歳急養子願書御取揚相成 但御前例有之本人より願書差出候」

また五十歳以上で特に藩主から養子願の差出を、その親類に恩命した事例もあり、その逆の事例も見られ、養子願出に対する許可・不許可が主家の利害によって左右される事を示している。

註 ³²⁾ 「例書、異、養子養女仮養子願之事」十六

「安永四未六月 御法令ニ有之

一養子ハ親類并相応之者を撰ひ若於無之ハ由緒を糺存生之内可申出候五十以上十七歳以下の輩及末期致養子と言共吟味之上可

立仮令雖実子筋目違たる義ハ不可立事」

正文と対比すると誤字があるが、「藩日記」には正確に記録されている。

(33) 「例書、巽、同」十九

「寛政七 九月四日

一鳥屋部与一郎倅兵庫義御足輕金藏養子相届候ニ付差遣申度千葉弥右衛門より口上書ヲ以申出先達而改易之者次三男ハ御足輕ニ差出候義不苦趣御沙汰有之ニ付御目付限承置勝手次第申達尤一通御席^(註家老席)ニハ申上置也」

鳥屋部与一郎は改易された為同人親類千葉弥右衛門より口上書を出したものである。

(34) 「例書、巽、同」廿七

「寛保頃の振合 ^(目付役か) 新六年控ニ有

一四十歳以下ニ而養子相願候義病身等之訳候と相極不申願上候義ハ遠慮すへし四十歳以上不苦事」

(35) 「藩法集」 盛岡藩下、「御富家重寶記」六〇〇、「惣て病身

無之外ハ、四十歳以下之者、養子願共取次申間敷事」

(36) 「例書、巽、同」九

「宝暦十四 申 四月

一近藤彦四郎儀五十歳以上迄養子願上不申太病ニ付親類共より養子願之口上書上取仕無料(註葬祭料) 共ニ被成下右ハ上より養子之義親類共へ申出候様御沙汰ニ付願出」

「御家中系譜書上」によると、近藤家は南部光行に随従して入

国した家柄であり、彦四郎は封禄を増加されており有能な人物であった事が配慮されたと思われる。これとは逆に、仮養子届を出さずに急養子を願出て不許可とされた事例もある

(仮養子の項参照)。

(ウ) 実子がないこと或は実子を廃嫡した事、附、順養子

実子を廃嫡し養子をする事ができるのは、本人が病身で勤仕困難のためすぐ退役の心算の時か、急養子の時に限定され、実子病身とか幼若等の事由がなければならぬ³⁷⁾

幕府法では、廃嫡された者は病氣が全快しても再び嫡子の地位を回復する事も他家相統の養子となる事もできないが、当藩では病氣が治癒した旨を届出或は養子願に書加える事により他家へ養子に遣わしたり、順養子にできた³⁹⁾。順養子とは養子となった者が養方弟を更に自分の養子とする場合のような、中継相統を意味するものである。幕府法でも廃嫡された実子を順養子に願出る事ができる場合があり、これは実子を廃嫡して養子をする際、養子願に他日健康を回復した場合に養子の順養子に願出るべき事を附記しておいた場合に限定される⁴⁰⁾。当藩でも此事は同様である⁴¹⁾。

「例書、巽」四一には、養子が養父の実子(養子をした後に出生した子或は前記の場合の一旦廃嫡され病氣が全快した旨を届出した子)を順養子とせず、他家へ養子に遣わす事ができる場合として、(1)、養父の遺言もしくは親類共の申立があった場合、(2)、勘定役を勤める為或は家計困難等で家の存続の為持参金を持って養子に入りその家を救った等の事由で、養子の実子に相統させなければならない義

理がある場合をあげている。

文化年間の武陽隠士「世事見聞録」の「武士之事」にも、当時旗本御家人の間に持参金を目的とした養子取組の風潮があった事を述べているが、持参金目的の養子は武士階級が経済的困難に陥った寛永末期頃から流行しはじめており、このような現象は当藩も亦例外ではなく、藩当局は前記のような肯定的態度を示している点が注目される。これは武士家族法の筋目尊重思想の一角が崩れた事を示す現象である。なお順養子となるべき実子の廃除を或程度家臣の任意に任せている点及び幕府法を引用している点も注目される⁴³。

註 37 「例書、異、同」四十「一享和元年四月十七日成田弥太夫実子病身ニ付岩泉権右衛門弟智養子願出ニ付御沙汰左之通」

「同」四一

「一成田弥太夫義実子病身ニ付岩泉権右衛門弟智養子願出御頭以^フ差出候事

一岩泉権右衛門より弥太夫江弟智養子差遣申度願以御目付差出候事

一右願出候處弥太夫実子兩人有之處一人なら須病身と申儀如何數殊ニ者願書へも病症之次第茂記不申差出何連兩人之実子病身之申立早速御取揚之儀如何數之趣当役^註、目付役より申立候處前例も有之候哉得与吟味之義御沙汰有之殊ニハ権右衛門弟ハ養父文治養子願之節病身之申立之者と相聞得候へハ快方ニ而養子ニも差出候次第ニ而ハ全体権右衛門義順養子ニも可致者与被存候此所共申談候様御沙汰之事

一右ニ付伺之上権右衛門願ハ吟味之筋有之候間早速御席へハ差出兼候趣申達置候事

一弥太夫願も前例有之取揚候或御番頭限吟味之義御達被致候事
一右申談候處弥太夫願実子何人と申訳并病症之治療養之次第も無之處何之趣意ニ而養子と申筋茂相分兼候全体急養子又ハ本人病身ニ而難相動直々隠居之心得等之節ハ実子病身或幼若之子細申立ニ而ハ仰付候義ハ有之候曾而近例岩泉権右衛門養父文治義天明七年実子病身ニ而中里寛右衛門弟養子願之筋ハ近年病罷成難相動然處実子兩人共ニ幼若之上病ニ而色々致養生候得共快方致兼安心無之ニ付智養子之願申立之上被仰付候後無間不縁ニ付致離縁其年中尚権右衛門養子願上被仰付候處無間致隠居候右等之義ハ無余養子細有之候得者格別之義弥太夫義ハ年老ニも無之且病身動仕難相成筋とも相聞不申候得者兩人之実子当分心永く養生相加兎角快方も無之其身動仕成兼候節ハ養子願之義勝手次第之事ニ候右様も無之兩人之実子退身為致候事不輕義ニ被存候間此度早速御取揚相成中間數候併病身ニ而無間隠居願之心得候ハハ支配頭限内々承届之上御取揚可然義當時御賄役動居候處病身ニ而難相成筋ニも見受不申事
岩泉権右衛門願弟文吾義ハ養父文治養子願之節病身之申立之者ニ御座候得共快方之旨御届申上候カ又ハ願書之内江右之次第書加不申候得ハ相成不申其上快方候へハ御沙汰之通順養子致候筋目之者ニ御座候殊ニ是迄養父之実子有之候得ハ順養子之御例与相目見且公儀御掟共ニ右之通と相聞得申候併父之実子

病身之處快方ニ而も養父遺言又ハ順養子難相立趣意親類中立ニ而も有之候得ハ其意ニ被成御任候御例も相目得候右子細ハ難申上筋ニ候得共勘定役又ハ難遊等之次第ニ而其家為相統持參金ヲ以致養子其者之為家相統も致候得者養子之実子家督不致させ候得ハ義理合難相立處も有之候間順養子難成趣意相立候得ハ其意ニ御任御聞届被成候筋与相心得候

右之通御座候間弥太夫願并權右衛門願も全体弟養子手筋ニ相當不申候間左之通兩人江御達願書御返可然被存候 以下略」目付の意見具申の通り御達がなされた事を付記する。

(38) 中田薫「徳川時代の家督相統法」(『法制史論集』、五二四頁)

(39) 註 370 参照

(40) 中田薫「徳川時代の養子法」(前掲書四一八頁)

(41) 註 370 参照

(42) 鎌田浩『幕藩体制における武士家族法』一三八頁―一三九頁
持參金養子の禁令については『徳川禁令考』前集第四、二二一―二二六がある。

(43) 註 370 参照

(2) 養子となる者の資格

(7) 養父の同姓者で、できるだけ近親である事、近親同姓者の中に相応の者がいない場合には他姓養子も可とされる点では幕府法と同様である。他姓養子願出には若干の形式的規制がある。

他姓養子願出について幕府大目付口達「例書、巽」の冒頭にあるが、近親同姓中に相応の者がいない場合には其旨を願書に記載する事、近親同姓中に養子となすべき該当者があるのに、それ等の者を養子に願わない場合は、その事由を別紙に記載添付する事を命じたものである⁽⁴⁴⁾。

当藩でも同趣旨の明和五年の法令があるが、養女願出についても触れている点で前記大目付口達と異なる。⁽⁴⁵⁾

江戸常府の家臣については、養子は一類の内から選ぶこと、一類の内にはない場合には国元の次三男から選ぶ事になっていた。⁽⁴⁶⁾ 一類の語が何を意味するか不明確であるが、江戸常府家中には江戸で召抱えた家臣が比較的多いので、兎角国元家臣と意思の疎通を欠く面があり、一類のうちに養子とすべき者が無い時は国元次三男から選ぶ事を命じたものであろう。

また他家中からの養子も確実な親族関係があれば可能であった。⁽⁴⁸⁾

註 (44) 「例書、巽」同一

「延享卯四 六月廿七日

一倉橋内匠助様(註 大目付)より御留守居被召呼中嶋武兵衛參上候處御口達之趣左之通

唯今迄養子又ハ仮養子願被差出候節近親之内相応之者無之間此者相願候旨申義無之候向後右之趣被相認可差出候且又近親之内弟甥従弟坏有之候得者詔有之其上不相願者先より断申聞候歟或病氣とカ或ハ存寄有之不相願与カ其訳別紙書付差出候様可致候」

(45)「例書、巽」同十

「明和五年子二月

一御家中養子或ハ養女之願申上候節以来何之統と申儀別紙相添可差出且統無之共無撫子細等ニ而養女之申立等致又ハ統之者之内相心之者無之他より養子致候ハ其旨別紙に相認可申出旨御沙汰有之」

(46)「例書、巽」同四

「宝暦元末年

一常府御家中養子願一類之者可願上候尤一類内無之候ハ御在處次三男之内可願上旨被仰付」

(47) 中田薫「徳川時代の親族法相統法雜考」(『法制史論集』五七六頁)によると、幕府は文政六年に一類とは親類、縁者、遠類本家、末家の総称であると定めている。

(48)「例書、巽」同廿一

「文化四 四月十二日

一常府宮寺茂実子無之間部若狭守様御家中上原多次右衛門四男甥之統ニ付養子願口上書相添願出被仰付」

(49) 養子は養父よりも年増でない事

養子は養父よりも年長でない事が必要とされ、幕府法と同様である。これに関する宝暦三年の幕府法令が「例書」に掲げられている事からも此事は推定できる。⁵⁰但し相統法で前記したが、妾腹に男子出生後妻に男子が出生して、次男とされた妾腹子は、年増であ

っても兄之養子とする事ができる。

(ウ) 伯父を養子にする事はできない

当藩では安永四年の法令で、伯父を養子に願出る事も相統に願出る事も禁じた。⁵¹幕府法では同姓であれば年増の者でも相統に願う事ができ、自己の伯叔父も養子に願出る事は禁じたが、これを相統に願出る事はできた。⁵²然し当藩でも享和三年の事例では、幕府法に準じて、伯父を相統に願出る事を認めるに至った。⁵³ただし伯父を相統に願出る事ができるのはその伯父が同姓であり且末期之願に限られ、この点でも幕府法と変らない。ただし医家には当藩でも特例が認められた例がある。⁵⁴

註(49)「徳川禁令考」前集第四、二二七八、享保五年四月四日、

「年増の養子難成」「前々に者急養子等者、年増之者も相願候得共、向後年増養子願者難成事ニ候間、頭々支配々⁵⁵此段寄々可被申伝候以上」等

⁵⁰ 前記註 (4) 参照

⁵¹ 「例書、巽」同十三

「安永四 未 六月

一伯父を養子ニ願上候義相統之願共ニ不相成候事」

⁵² 「諸心得挨拶留下」七三条、文化元子年十月廿六日、水戸殿御城附よりの問合の下札「書面子無之者同姓並親類之内、養子ニ可相成相心之者無之、他家より養子致候時、其當人より年増之者を養子ニ相願候義不相成儀と存候、尤相統と相願候ば、其當人より目上統之同歳より以上之者ニ候得共、右者家之厄介同姓等に

限り候儀ニ而統近候共、他姓より相統相願候儀は是又不相成と存候」(中田薫『法制史論集』第一卷三八八頁)

53)「例書、巽」同四二(幕府法にならった例)

「享和三亥八月三日

一船越求馬病氣大切候處実子無之殊身近親類相応之者も無之ニ付叔父清太夫江家名相統被仰付被成下度旨願出候處前々被仰出有之不相成事ニ候得共公儀ニも叔父江末期相統願之御例茂有之ニ付相伺候處以来右之通可被仰付旨金石衛門方(註 家老)御沙汰」

54)「例書、巽」同四六

「文化三寅八月十三日

一藤田龍碩病氣及大切いまた実子も無之上親類内相応之者も無之幸養方叔父如水ト申者有之御近例も有不苦義ニも御座候ハ相統ニ相願申度旨親類共内々申出候得共右如水御支之義有之難被仰付候旨申達然處龍碩実方先岩崎道泰義養父應庵弟ニ而有之候間不苦義ニ御座候ハ相統願申度旨申出候ニ付左之通御用人を以龍碩親類へ御達之上相統願御取上判元改被仰付

藤田龍碩儀病氣差重候ニ付相統願可申上處未実子無之身近親類共ハ勿論身寄相応之者無之ニ付無余儀岩崎道泰義実兄之統ニ候得共養家へ対候而ハ伯父之名儀も可有之之心得を以家名相統の義願出候右道泰義者全鉢別家名之者假令伯父之統相成候共家名相統の願御取揚難被仰付御次第ニ候得共医家別段之思召を以願書御取揚被成候義故今後之例等相心得間敷候仍而判元見届被仰付候」

本例では他姓の伯父を「医家は別段」として許可しているが、前例としないと附記している。

(エ) 父が出奔した場合その子については養子願出も家督相統も許されない。幕府法では当初父母出奔の場合、その子には家督相統も養子願出も許さなかつたが、宝暦九年十一月この禁令を緩和し、父出奔の場合に限定した。⁵⁵⁾この法令改正は次のように「例書」に記載されており、当藩でも幕府法令の改正にならった事を示している。

「例書、巽」同十八

「宝暦九卯十二月

一御目付御廻状ニ而母出奔其子家督并養子願難相成趣先達而被仰出處以来不苦候趣被仰出候」(御目付とは幕府大目付の意)

(オ) 庶民を養子とすることは禁止される

当藩では安永二年これについての法令を出し、町人を養子・養女・養兄弟姉妹とすることを禁じた。⁵⁶⁾幕府法でも御家人が町人を養子とする事を禁じていたが、支配階級である武士と被支配階級である庶民との区別を明確にして身分階層的秩序の維持を意図したものである。⁵⁷⁾養兄弟姉妹は幕府法の禁ずるところであるが、⁵⁸⁾当藩でも宝暦二年同様の法令が出されている。⁵⁹⁾

註 55) 『徳川禁令考』前集第四、二二九六、延享四卯年五月廿一日「母出奔跡其子相統之儀ニ付御書付」、同二二九七、二二

九八参照

56) 「例書、巽」同十一

「安永二己

一御家中之面々在町由緒之者養子并養女或ハ養兄弟姉妹之願等遠慮可有之事ニ候以来身元無之者願上候可為無用之御沙汰」

(身分階層制の維持を意図したものである)

57 中田薫、前掲書三八六頁、急養子一件願書御書付留

58 『徳川禁令考』前集第四、二三二三、元文元年八月二日

「養弟養妹之儀ニ付御触書」

59 「例書、巽」同五

「宝暦二年甲六月

一養弟養妹可為無用旨先年御触之處心得違有之ニ付尚又御触被差出」

(カ) 改易された者の子を養子とする事は禁じられる。⁶⁰ 奉公忠誠に欠ける所のあつた者の子に対する一種の縁坐制である。ただし改易された者の倅を足輕の養子とする事を許した事例については前記したが、これは改易にされた者の倅を足輕奉公に差出す事は構わないとする当藩法令に由来する。

註 60 「例書、巽」同廿八

「寛政五丑三月廿六日

一工藤常右衛門倅先達而同姓京之助出奔改易之砌駒木助右衛門甥之続ニ付引取宗門ニ付置候處此度杉浦市太郎勤番ニ付右之者仮養子申合差出候處難相成趣ニ而御返相成以来為見合記置尤京之助弟之続也」

養子願が聞届けられ養子仰付の御沙汰があれば養子取組の効果が発生し、養子は養方の嫡子となり、養父母・養方親族とは実子と同様の親族関係が発生し養父の親権に服する。従がつて養父は養子を廃嫡する事もできるが、それよりも養子を離縁するのが普通である。

(ア) 離縁の事由

養子離縁の為には、當藩法令についてこれを見れば、養子の「不行跡」、「病身」および「養子が養父之心に叶不申候」かのいずれかの離縁事由が必要であり、更に頭支配を経て離縁の届出をしなければならぬ。⁶¹ 以上の点は幕府法と同様である。また幕府法と同様、離縁については養実双方の熟談が必要であつた事は、「例書新押」に養子取組についても熟談が必要とされている例がある事から間接的に推定できる。

(イ) 養子離縁による不利益

養子を離縁した場合に、その事由が、奉公が困難な程度の養子の重病・不行跡ではなくて、「輕き病」或は単に「養父之心ニ叶不申」と言う程度の事であれば、養子をした以後に出生の実子があつても、その者に家督相続をさせる事は禁じられており、幕府法と変わらない不利益を養父は受ける。ただしこの場合、其実子に分地を願ひ或は他に養子に遣わす事は禁じられない。⁶³

幕府法では、離縁された養子及び其子は最低十年間は他の養子となることは禁止される。⁶⁴ 当藩にはこれについての法令も事例もないが、これに類した不利益を受けたのではないかと思われる。

(3) 養子離縁

当藩でも幕府でも、養子離縁について、その事由を限定し、養子を

した以後に出生の実子が家督相続をする事を厳しく規制している。養子離縁は養実双方及び双方の親族間に不和を生じさせ、家臣統制上主家の利益に反する。また特に実子に相続させる為に養子を離縁する事は怨恨の原因となり、倫理的にも非とされるからである。

ただし養子離縁後出生の実男子について、これを嫡子とする事を許可した事例がある。⁽⁶⁵⁾これは養実双方余儀ない事由があり、遺恨を生ずる惧れがないことによるものであるが、定例とする事のできない事例である。

(ウ) 離縁の制限

当藩では二度目の養子離縁については、双方より不縁の趣意を目付まで内々申出て、目付の内諾を得た上でなければ離縁の届は許されず、養子再度の離縁は厳しく制限された。⁽⁶⁶⁾養方による恣意的な離縁を規制する為である。幕府法でも離縁の許される回数については不明確であり、⁽⁶⁷⁾不熟或は軽い病氣を理由として三人まで離縁した者は、咎を受け⁽⁶⁸⁾る場合もあり、四人目の養子願は容易に許可されなかったと推定されている。

註 (61) 「例書、巽」同廿五

「享保十九 五月

一 養子致候者若養子を返候義有之時最前致養子候以後実子出生候共其実子家督被仰付間敷候又養子を可奉願候然共右返候養子行跡悪鋪品有之候敷又ハ病氣ニ而決而御奉公難相成儀ニ相極養子返候ハ頭支配得与聞届実子ニも相尋無相違候ハ其品申上頭

支配より実子を家督ニ可奉願輕病又ハ養子を心に叶不申一通之儀迄ニ而養子返候跡ハ実子家督被仰付間敷候但御奉公被仰付間敷との義ニハ無之候分地奉願候敷養子杯ニ遺候義ハ可為勝手次第候」

(62) 「徳川禁令考」、前集第四、二二九五、元文三年四月廿日

「養子病身ニ付致離縁候處実方ニ而又候養子相願候事」

(63) 註(61)参照

(64) 「徳川禁令考」前集第四、二二九五

(65) 「例書、巽」同五十

「文化五辰八月

一 荒谷五太夫先達而養方弟小平太養子願之上被仰付候處小平太病死後実子病身ニ付小野寺江助弟久助賀養子致置其後程過候得共未婚礼も不致内江助太病ニ付内々離縁の無心有之無擧次第二而離縁致遺候處其後ニ五太夫出生之男子有之候得共一旦養子致而及離縁今更実子申立候儀無擧離縁とは乍申如可有之哉之旨当役迄問合ニ付御内分伺之上不苦候旨及挨拶事

但右者離縁の次第ニ寄内々遺恨ニ相成候筋ニ有之候而ハ実子嫡子ニハ難相立事申談候得共五太夫養子離縁筋ハ双方無余儀事ニ付右之通及挨拶候得共後年之定例ニハ難相極例ニ有之候」
(66) 「例書、巽」同十四

「安永四末六月

一 養子式人迄離縁之節ハ双方より内意申出之上ニ無之節ハ届相成不申事

但不縁之趣意双方より御目付迄申出以口上書御届申上北村藤助松田平右衛門例」

(67) 中田薫、前掲書、四〇〇頁―四〇一頁

(68) 同右

II 末期養子（急養子）

末期養子は重病危篤の際に急拠願出るもので、慶安四年の幕府法令に基づく。幕府法では急養子願出の要件として(7)願出人が原則として五十歳以下十七歳以上であること（但しこれには立法の変遷があり、正徳六年以後は、五十歳以上については例外が認められるに至ったが、十七歳以下については禁止された）(71)判元見届、(72)親類書、遠類書、養実双方親類連名の添願書の添附があげられる。

急養子には簪養子・順養子を願出ることも可能で、同姓であれば年増であつても末期の家督相続に願出る事もできる。

急養子願は停止条件付養子願であり、願出人の死亡を条件として養子を仰付けられるものであり、この仰付により養子取組の効果を発生する。

末期養子願出の要件は、当藩でも幕府法とあまり変らない。江戸勤番の者については親類連印を以て願出なければならぬが通常は本人よりの末期養子願に親類共の口上書を添付する。⁽⁷²⁾なお当藩では準急養子と称すべきものがある。これは重病危篤までには至らなくても、病中養子願を急養子に準じ取扱うもので、目付・徒目付の判元見届を要するが、養子仰付は本人死亡をまたずに行なわれる。⁽⁷³⁾

末期養子願出について幕府法には見られない要件として、末期養子仮養子願出前に縁組（婚姻）がなされている事が必要とされた。⁽⁷⁴⁾然しこの要件は安永八年には一度適用を除外され、さらに寛政六年に至り、幕府法にはない規定であるとして廃止された。⁽⁷⁵⁾

急養子取組は願出人死亡後の仰付により、養子取組の効果を発生する。急養子願受理後、願出人が死亡すれば、養子仰付以前でも養子となる者は忌服を受けなければならない。⁽⁷⁶⁾

急養子願を差出し判元改が済んでも死亡せず、小康状態が数十日続いたような場合には、養子取組の効果は発生しない。このような場合に経過を見た上で番代願を差出し仰付られた事例も見られる。⁽⁷⁸⁾これは病中養子願は急養子に準じ判元見届を要するとした當藩法令を適用した処置と考えられる。

註 (69) 『徳川禁令考』、前集第四、二二六二、「五十才以上以下養子願之事」

(70) 『徳川禁令考』、前集第一、一六〇、天和三癸亥年七月廿五日、「武家諸法度十二条」、同前集第四、二二七二、正徳六年二月廿六日、「五十歳以後之面々急養子之事」、同二二七七、享保四亥年八月朔日、「五十以上十七以下之者急養子之事」等

(71) 「例書、巽」同廿六
「寛政六寅閏十一月十七日

一急養子以来勤番之者親類連印ヲ以願出候様御目付ヲ以御沙汰有之 但何々江申遣ニ相成候事」

(72) 「例書、巽」同四四

「文化三寅四月十日

一久保沢新之助去丑九日十日親跡式無相違被成下候處即日下宿より病キニ而相引鶴膝風相煩其後一圓出勤無之數医得療治色々葉用致候得共兎角全快御奉公可仕躰無之ニ付弟勝五郎養子願書差出親類共よりも口上書を以右之次第申出候

一同日病中養子願ニ付御沙汰之通判元見届被仰付候

一久保沢新之助養子願之通被仰付名代之者江申渡候

74 「例書、巽」同三五

「寛政六寅十二月廿四日

一飯岡鉄五郎太病ニ付未縁組相済不申ニ付前例吟味之處安永八年三月七日鈴木松五郎縁組相済不申處太病ニ付急養子願本人より差出候例を以御内々相伺候處伺之通可然候段新兵衛方七右衛門方金右衛門方御沙汰ニ付本人より願書差出」

76 「例書、巽」同三七

「寛政十寅七月廿五日

一成田又四郎太病ニ付急養子願差出候處同人縁組願去十二日差出未御沙汰無之ニ付前例吟味致候處飯岡鉄五郎太病ニ付縁組急養子願申度親類伺出候處鈴木松五郎縁組前急養子願御取揚例茂有之其節相伺候處飯養子ハ縁組前不相成候御沙汰有之候得共公儀ニ而も縁組前養子願御構無之旁々縁組前不苦趣ニ而為差出御取揚御例も有之殊ニ此間者縁組願茂差上置候事故直々御取揚可然之趣相伺候所伺之通被仰付」

77 「例書、巽」同六

「宝暦五年亥六月廿四日

一病床ニ而急養子願書納御沙汰無之内病死候ハ養子之者不及伺当日より定式之服忌受之尤忌服之届前々之通可申出候是迄ハ定式之忌服受候様被仰出受来候得共自今ハ前意之通相心得候様向々江御沙汰有之事」

78 「例書、巽」同五三

「文化十五 五月」

一奥谷兼吉去々子年より病氣之處太病ニ付同人姉江室岡半兵衛弟急養子相続願差出判元改被相済候病死不致模様少々ハ宜敷見得候ハ共兎角全快御奉公可致体無之ニ付日数十日程過番代願差出御取揚ニ相成」

III 仮養子

諸藩においては家臣の江戸勤番や遠所出張の際に、急病或は不慮の事故による死亡の場合、急養子願出、判元見届が不可能であるから、出発に先立ちあらかじめ仮養子願（届）を藩に提出し、遠所における不慮の死亡にそなえる事が必要であった。仮養子願を提出してにおいて、国元に帰る以前に死亡すれば、判元見届を要せず、⁷⁹急養子願出と同一の効果を発生する。したがって仮養子は急養子（末期養子）の代用或は変形である。継嗣なく死亡した場合に家が断絶するのを回避する手段である。参勤交代で大名が在国し、家臣が遠所に出張する場合にも事情は同様であり、幕藩共に仮養子制を設ける必要があった。

註(79)「古今例拔集」嘉永二年二月十一日「一船越与右衛門志和御役

所詰之處病氣ニ付交代無引取願之通被仰付引取之旨申出病氣不相勝退役願差出引統兼而志和詰之節仮養子申上候弟養子願差出兼而申上置候事故判元見届不仰付候事為見合記置也」⁽⁸⁰⁾「附、天保十二年七月十九日美濃部定賀道中より病氣罷成存命不定罷成兼而申立置候仮養子直々養子願相統願申出候節判元見届無之例を以此度取計也」

1. 仮養子願出の要件

(1) 嫡子または家督相統に適する実子がないこと。この要件は幕府法と変りはない。⁽⁸⁰⁾江戸勤番にあたつては、五歳以上の実子があれば、御目見以前でも実子届を提出し（この実子の地位は願出人が国元に帰るまでの願出人死亡を条件とする一種の停止条件附相統人と推定される）、⁽⁸¹⁾実子がない場合は七歳以上の者を仮養子に願出なければならぬ。⁽⁸²⁾これを願出ないで死亡すれば改易となる。

註⁽⁸⁰⁾中田薫、前掲書、四三五頁

⁽⁸¹⁾本稿、相統法、実子届の項参照

⁽⁸²⁾「例書、巽」同五二

「天明五巳十一月四日

一佐々木基太夫勤番中仮養子可申上處無其義及末期ニ養子願出候ニ付身帯改易被仰付以御書付基太夫親類共御目付立合被仰渡」
(2) 仮養子願出前に縁組（婚姻）がなされていること。

この事については末期養子の部分で前記した。「例書、巽」養子養女仮養子願之事、三十、寛政五丑六月五日の項に「縁組前仮養子届不相成候御例尤輕願ハ二重茂差上候得共、仮令手札願ニ而

も重キハ二重願不相成御前江被達御聴候願筋ハ不相成候御席限（註 家老席）御沙汰相済候義ハ不苦候……」とある。末期養子とその変形である仮養子について、幕府法にみられないこのような規制があるのは何故か。養子を願出るのは廢嫡により家督を相続すべき者が存在しなくなったことに基く場合もあるが、通常は婚姻関係が存在するにもかかわらず実子が出生しない事に基づくものである。したがって婚姻成立以前に養子を願出るのは、筋違いであり、願出の根拠がないとする觀念があり、そのような觀念に基いて設けられたのがこの規制ではなかったか。この規制は通例の養子にはみられず、規制の対象は末期養子と仮養子のみである。末期養子は病氣重篤の際急抛願出るものであり、仮養子は江戸勤番や遠所出張を命ぜられた時急抛願出るものであり、いずれも継嗣なく死亡したために改易となる事に対する特例的な救済方法である。このような特例的救済手段による事は、主君あるいは藩當局から見て決して望ましいことではなく、末期養子・仮養子の制度に頼らなくても済むように、事前に実子出生の可能性がある婚姻関係を成立させて置く事を要求したものと推定される。前記「例書」本文で、重き願を同時に或は相前後して差出す二重願を禁じているのは、江戸勤番等に際して俄に縁組願と仮養子届（仮養子願としたり、仮養子届としたり史料に混乱が見られるが、「諸願并届書案文」等の類では「仮養子届」となつて居り「届」が正規と考えられる）のような重要な願を重複して差出す事を禁じたものと考えられる。註⁽³⁰⁾に「重き願」、「輕き願」について前記

したが、縁組願・仮養子届は形式的には「軽き願」とされるが、実質的には主君まで上達されるので「重き願」とされた。なお、縁組前に養子願出を禁止する類例は、高崎藩に於ても存在したように思われる。⁽⁸³⁾ なおこの規制は天明四年の法令に既に見られるが、寛政六年に廃止された事については前記した。

(3) 仮養子願出は、勤番登と遠處出張の場合に限定される。この事については註⁽⁸⁴⁾に記する。

(4) 仮養子にも異姓養子が認められる。⁽⁸⁵⁾

同姓養子が不可能の場合、異姓養子が許されるのは通例の養子と同様である。

(5) 仮養子は最低限御目見の資格のある家から選ばれる。⁽⁸⁶⁾

註⁽⁸³⁾藩法研究会編『藩法集5、諸藩』、高崎藩・規矩帳、百廿二

「子細有之、縁談取組不申共、養子相続之義は可被仰付候間……」とある。

⁽⁸⁴⁾「古今例抜集」天明二寅八月廿四日「一勤番登之者縁組願不相濟候得ハ仮養子届相不成候旨被仰出 但遠所御用共ニ」

註⁽⁸⁵⁾「例書、異」同四五

「文化三寅二月七日

一奥寺萬右衛門石巻為御登米御用ニ而此度罷越候ニ付未実子無之久保沢新之助弟鉄五郎仮養子申合双方より以手札御届申出候處新之助義去丑年九月家督即日より病氣ニ而相引勤方向も不相濟今以出勤無之候得共仮養子御届之義如何之筋ニ被思召置候ニ付相談被仰付候處御前例も不相知候得共仮養子之義も専由緒を以申合

候事ニ候得ハ仮令勤方向不相濟候而も御聞届不苦筋勿論仮養子御聞届ニ難相成次第に相成候而ハ血筋を以急養子等相届候者有之候而も難差出候義ニ相成候左候へハ新之助ニ不限右様之者有之候節ハ血筋之者ニ而も養子相願候様無之次第ニ相成後々御支ニも可相成筋故御聞届被置可然旨相談申上候處談之通御聞届ニ相成爲見合記置也」

この事例は家督即日病氣となり、勤方向も未済の者が仮養子届を出したのは疑義があるとして家老から評議を命ぜられた目付一同が、病氣のため勤方向も未提出である事と、仮養子や末期養子の願出は無関係であると答申しその通り處理されたもので、家臣の側の利益を考慮した事例でもある。

⁽⁸⁶⁾「例書、異」同三二

「寛政六寅五月十七日

一上野彌六郎勤番登ニ付上野湊磨倅仮養子申合願差出候而不苦候哉伺出相伺候處伺之通被仰付尤湊磨御目見モ有之旁向方より願差出可申哉相伺候處彌七郎願計出候様御沙汰」註（上野湊磨は町医、上野彌六郎は給人である——「御家中系譜書上」「御家中分限帳」）

2. 仮養子届の聞届による効果

仮養子届が聞届けられると仮養子取組が成立するが、仮養子は勤番登や遠所御用の都度届出るものであり、国元に帰着する迄効力を有するに過ぎない。幕府法では相当の理由がない限り毎回同一人を願出なければならないが、當藩においてはこれについての史料がな

いが、恐らくは同様であつたと思われる。

當藩において見られるその他の効果として、仮養子になった者を他の者が本養子に願出することは禁止される。仮養子願出が聞届けられても養親子関係は発生しないけれども、願出人が死亡した場合は末期養子と同一効果を発生するので、仮養子となった者を更に第三者が本養子とすることは許されない。⁽⁸⁷⁾

その他、仮養子を勤番登・遠所御用に若党として同行することは許されない。⁽⁸⁸⁾同一危難に遭遇する惧れがあるからである。

註⁽⁸⁷⁾「例書、巽」同十五

「安永四未六月

一仮養子申立置候者を別人より本養子ニ願上候義不相成候事」

⁽⁸⁸⁾「例書、巽」同二

「延享四年二月四日

一勤番登或ハ遠所御用之節仮養子申立候者若党ニ召連候義不相成事」

3. 仮養子願出の手続

仮養子届出は双方から届出なければならない。⁽⁸⁹⁾ 養実双方が江戸勤番の場合には、双方の留守預から願出る事ができず、本人から願出なければならない。⁽⁹¹⁾

註⁽⁸⁹⁾「諸願留帳」には「仮養子双方届之事」とある等

⁽⁹⁰⁾當藩では江戸勤番に際し、留守中各種願届等を代行する者を親類から選定して置く事になっていた。

⁽⁹¹⁾「例書、巽」同廿九

「寛政五 六月四日

一仮養子願双方留守預より願相成不申本人より願候事江戸詰候得者江戸ニ而申上近例也」

四 婚姻法

「例書」等の當藩武士家族法史料において、最も詳細なのは養子法関係のもので、相統法関係がこれにつき、最も史料が少ないのは婚姻法関係であつて、史料に記載されている事項は幕府法令に準じているので、史料に記載されていない部分も恐らくは幕府法と同様であろうと推定するに留まり、明確な事は判らない状態である。したがって婚姻法の詳細を述べることはできず、史料の存在する部分についての記述に限定される。

幕藩期には婚姻は縁組または縁談と呼ばれた。婚姻法令の大部分は「例書、巽」諸願之部に「縁組願之事」として記録されているが、前記のように史料が不充分なので、婚姻の成立を中心とし、婚姻の解消について若干記述するに留める。「例書」所収の法例は一般に問題点・疑問点のある事例であり、通常の場合の事例は極めて少ないので、幕府法と対比できない部分も少なくない。

1 婚姻の成立

1. 形式的要件

(1) 縁組願の差出（縁組願披露）と聞届・仰付

幕府法と変りなく、家臣とその家族の縁組については、縁組に先立ち、縁組願を藩当局に差出して、それが聞届けられ、願之通仰付られた後、縁約を取りまることができた。⁽⁹²⁾ 縁組願もこのように許可制であり、婚姻当事者の属する両家の當主から支配頭を通じて家老に上達され（これを縁組願披露と称した）⁽⁹³⁾ さらに家老から主君の上聞に達した。縁組願の吟味（審査）⁽⁹⁴⁾ に當るのは相続・養子の願と同様に目付である。ただし次三男隠居は奉公すべき立場にない事から輕輩武士の場合は身分的差別から「支配頭（限）承置」即ち支配頭専決処分が取られるのが普通であった。

幕府・諸藩において縁組許可制⁽⁹⁷⁾が取られた背景には、元和元年以来の武家諸法度「私不可結婚姻」に基づき、当初は大名や將軍側近の幕臣に対するものであったが、やがて幕臣全体に對象が拡大された。⁽⁹⁸⁾ これは慶長二十年の武家諸法度にあるように、「縁を以て党をなし、姦謀を巡らす」ことを防止するのが主目的であり、従つて諸藩の中でも、當初はやはり重臣層と幹部家臣だけを婚姻許可制の對象としていた藩もあり、⁽⁹⁹⁾ その意図がどこにあったかがわかる。これが官僚機構の整備と共に全幕臣・全家臣に統制の拡大されたと言うのが一般的沿革であらう。

註⁽⁹²⁾ 「諸願留帳」に「縁組双方願之事」とある等

⁽⁹³⁾ 「例書、巽」ス（年月日なし）

「一縁組願ハ両支配頭互ニ願書取替披見之上ニ列ニ御席ヘ罷出申立候」

「御用人所例書」、配下縁組之事に「一双方同日に銘々支配頭互

御手札差出ス支配頭申合御席江一度ニ出右手札上候御受取置る趣挨拶之時退出ス御席江出候前ニ手札相互ニ取替吟味之事、一双方配下斗ニ候へ者当役（註 用人）壹人罷出手札上ル」

⁽⁹⁴⁾ 「例書、巽」ス

「宝曆四戌三月

一御家中次三男縁組願ハ支配頭承置候様御沙汰隠居の方ハ追而御沙汰被成候筈」次三男が召出されたり他家の養子になる以前から妻があつた場合は目付にその旨申出、目付は「承置」に止めた。

「例書、巽」ス 宝曆七丑二月「一御家中二三男被召出前或ハ養子ニ参候前妻有之趣申出候ハ御目付承置御席ヘ不及申上旨被仰出」

⁽⁹⁵⁾ 「例書、同」ス

「天明三年七月六日一隠居縁組願支配頭限是迄承来候處此度清右衛門方（註 家老）妹戸来勇太郎親惣右衛門（註 家老就任の家格）縁組願之通被仰付仍而以来御役人以上隠居縁組願右之通平士ハ是迄之通」

⁽⁹⁶⁾ 輕輩武士とは給人より下の階層である勘定方・馬方以下を指す。一例として従士の例をあげる。

「例書、巽」ス（年月日欠）

「一御徒士縁組願ハ御目付限承置御席江申上候常御供（註 徒士を指揮する役職）を以願之通申達候事」目付専決処分であるのに家老に報告するのは徒士が主君の御供をするからであらう。

(97)『徳川禁令考』前集第四、二三二二、享保十八丑年四月廿八日

法令「縁組之願申上之、婚儀整候外ハ、妻ニ仕儀、向後可為無用旨、被仰出候事」

同、前集第一、一五六、慶長二十年七月、武家諸法度第八條

「私不可結婚姻」

(98)寛永六年武家諸法度「一國主、城主、壹万石以上并近習、物頭者。私不可結婚姻事」

(99)例えば盛岡藩の場合『藩法集9、盛岡藩上』御家被仰出、一〇、明暦二丙申年被仰出に「……自然自分ニ縁組仕候者有之候ハ、向後跡式被下間敷由被仰出」とあるが、この法令の対象が専ら重臣層・幹部家臣層であった事は、同じく御家被仰出、八八、享保七年三月十八日の「覚」に「一御家中諸士縁組願、只今迄ハ高知・御者頭、其外重立候諸士、始ての縁組斗申上被仰出候處、此度被仰出候ハ、縦二度目・三度目にて縁組仕候節可申上候、尤右之外小身者とは不及披露、内々にて縁組仕来候處、向後は小身者共も縁組双方願書を以申上候様被仰出御目付岩間全兵衛え申渡之」とあることによつて知られる。

① 縁組願は実質的には「重き願」である。

當藩における「輕き願」、「重き願」については、先に触れた。縁組願は「輕き願」である手札願に属するが、前記したように主君の上聞に達するので、実質的には重き願である。縁組願が形式的には輕き願に種別されたのは、相続や養子と異なり、主君に対する奉公や封祿と直接関連しないからである。然し縁組により将

来奉公すべき嫡子出生の期待可能性が生ずるのであり、さらに家臣間の閥閥関係にも主君は関心を持たざるを得ないのであり、また法令違反の縁組を禁ずる必要もあるので、実質的には重き願として取扱われたものと考えられる。

②

縁組願差出について疑義がある場合は縁組願差出以前に支配頭に相談し、支配頭を通じて内分伺を差出し、内々の沙汰を得た上で縁組願を差出すのが慣例である。「例書」に記録されている内分伺の例としては、無調法・非行・犯罪により改易された者の娘等の縁組に関するものがある。(100)

註(100)「例書」同、ス

「文化七年二月七日

一荒川格兵衛先達改易被仰付候節同人娘親類稻垣彦八郎方へ引取厄介致置候處此節御家中望人茂有之ニ付願書差出苦ケ間敷候哉之旨内分問合有之ニ付相談致候處格兵衛義出奔後被召捕地下ニ御落御片付被仰付候得共手廻之義ハ地下ニ御落被成候と申筋ニハ無之改易ニ付親類彦八郎方へ引取手廻宗門ニも相付置候程之義ニ有之候間縁談願差出候とも不苦筋と申談其御内聞御席正相伺候処談之通苦ケ間敷御達有之仍而縁談願差出候とも苦ケ間敷哉之趣口上書差通差出右御沙汰之處ニ而願書等差出候而可然旨彦八郎へ挨拶口上書差出候処縁組願不苦候旨御沙汰」當藩では改易は普通封祿の没収を意味し、この例のように武士身分の剝奪を伴う事は稀である。改易された者の家族は親類に引取られ其厄介となるのが通例である。この例は厄介となった改易さ

れた者の娘の縁組についてのもので、改易された父は武士身分を奪われたが、その家族は庶民に落されたのではないから家中武士と縁組しても支障はないとしたものである。

(2) 縁組の派生的効果

幕藩において縁組が済まなければ末期養子・仮養子の願出を許さないとする法令が存在した事については前記したが、寛政六年にこれが廃止される迄、縁組が成立している事が末期養子願・仮養子届提出の前提要件とされていた。

① 結納の取かわしー縁夫・縁女関係の発生

幕府法では結納取かわしにより縁夫・縁女関係（許嫁関係）という準婚姻関係が発生し、縁女の密通は姦通罪に該当し、縁夫死亡の場合は縁女を更に縁夫の弟に再縁組する事は禁止された。⁽¹⁰¹⁾ 然し「例書」等には結納に関する事例はない。服忌令に関する文書が目

付関係文書中にふくまれていて、それが遵行されていた事、「服忌令」元禄六年追加に「一婚儀未相調内ニても祝儀取かわし候へゝ夫婦相互ニ定式之忌の日数遠慮すへし」等の文言がある事、縁女の語が「例書」にある事等により、結納の取かわしが準婚姻関係発生の要件とされ、幕府法と同様ではなかったかと推定されるにとどまる。

② 婚礼（婚姻、婚儀）の挙行

縁夫・縁女が婚礼を挙行する事により、夫婦関係が成立し、宗門（戸籍）も改められる。⁽¹⁰²⁾

註⁽¹⁰¹⁾ 中田薫、前掲書四七〇頁

⁽¹⁰²⁾「例書 坤」五七「縁女引取不申内病死何連ニ而葬送可致哉伺候事」

「享和二戊 十月廿四日

一福田藤太夫倅幸太郎妻福田多右衛門娘縁組ハ相済候得共未引取前婚礼無之内病死ニ付葬式何連より差出可申哉内分間合有之処多右衛門方ニ而葬送致候様挨拶右之取計多右衛門寺江相葬候由右例も無之候得共宗門も引取婚礼前ハ里方宗門故右之通及挨拶」

2 実質的要件

(1) 身分的制限

幕藩期の社会は身分階層制社会である事から、武士婚姻法にも當然これが反映し、身分階層制を損うような婚姻は原則として認められない。

(ア) 家臣相互間の縁組に対する制限

家臣団は身分階層制に基づいて組織されているが、家臣相互間の縁組に対する身分的差別による規制は比較的緩やかである。家中番士と給人の縁組は寛延元年禁止されたが、翌二年この禁令は朝令暮改的に解除された。⁽¹⁰³⁾ これは総家臣数が四百名内外⁽¹⁰⁴⁾の当藩において、縁組の範囲を同一身分階層に限定すれば、縁組の成立困難となる事、既にそれ迄番士と給人の間には縁組が繰返されていた事等が廃止の原因であろう。また「御家中系譜書上」を検討すれば軽輩武士とされる勘定方・馬方等も給人の次三男の就職の場として利用されていた観があり、家臣団内部における縁組範囲の制限が緩やかであったのは以上の事由によると思われる。

(イ) 家中諸士と武士に準ずる者との縁組

「家中分限帳」に姓名を記載される家中諸士といわば準家臣である足輕との縁組は認められないが、家中医師については幕府法同様「医者」は別段の義」として特例が認められている。⁽¹⁰⁵⁾

妾を妻に直す事については、幕府法に変遷があり、最終的には享保十八年妾を妻に直す場合も縁組願の差出を命じた。⁽¹⁰⁶⁾ 當藩では、次三男が召出され、或は養子となった際、それ以前から、武士に準ずる者の娘を妾にしていた場合にこれを妻に直すことを認めていた。⁽¹⁰⁷⁾

註⁽¹⁰³⁾ 「例書、同」ス

「寛延二巳十月

一 御家中縁組御番士御給人取組之義不都合に付遠慮可仕旨去冬被仰出候得共以来不苦旨被仰出候事」

⁽¹⁰⁴⁾ たとえば幕末期の家臣総人員は三七五名で、内訳番士は一五三名、給人は一五三名である。拙稿、「八戸藩家臣団の階層構成」(八戸高専紀要第九号) 参照。

⁽¹⁰⁵⁾ 「例書、異」ス

「文化六巳二月

一本組小頭(註 本組は足輕組の名称)森福次郎娘岩井十兵衛養女ニ而神山龍仙と縁組尤下賤より養女諸士縁組相成不申、義兼而被仰出候得共、別段之義故已来不苦旨御沙汰」

⁽¹⁰⁶⁾ 『徳川禁令考』前集第四、二三二一

同 右

二三二二

⁽¹⁰⁷⁾ 「例書、同」ス

「文政元年 十月

一 蒔田軍蔵部屋住より御足輕大橋吉兵衛娘妾ニ召使居候処今般被召出候ニ付妻ニ相直申度段以口上書願上候処先年久保助右衛門兄治郎右衛門養子ニ相成候節部屋住より神当阿部駿河妹妾ニ召使居候ニ付妻ニ相直度旨願上之通被仰付候御例を以願之通被仰付」

(ウ) 武士と庶民との縁組

註⁽¹⁰⁵⁾ に見られるように、武士と庶民との縁組禁止を潜脱する事を禁ずる法令が出されていた。然し武士家族中の女子と庶民の縁組を非公式に認めた事例⁽¹⁰⁸⁾もあり、やがては公式に認めるに至った。⁽¹⁰⁹⁾ この場合いずれも下級武士家族の女子についての例であり、武士と庶民との境界部分に於ては身分階層制が崩れかけていたと見られる。このような事は下級武士の経済的困窮に対する藩當局のやむを得ない配慮であり、この点で家臣の利益を考慮したとも言えるが、視点を変えれば、下級武士の困窮を救済するのは主君の利益であつたと言う事もできよう。

註⁽¹⁰⁸⁾ 「例書、同」ス

「宝暦七丑 二月

一 坂本武兵衛妹劔吉村久兵衛方へ縁組之内意申出候ニ付御内意相伺候処在町へ遣候義相成間鋪旨被仰出隨而小給之者大勢之手廻相片付兼迷惑可致候間介抱相頼置候趣にいたし差遣始終は手廻

内与相心得出生有之候共忌服之沙汰ニ不及候心取ニ遣可申趣御目付心得となし内々申達候様御内々御沙汰」

(109) 「例書、同」ス

「安永八亥 正月晦日

一猪去七郎治娘四戸忒右衛門手廻宗門ニ付置候処右宗門相除在方望人茂御座候ハ、差遣申度申出当役限承置候様被仰付候事」

(2) 縁組を禁止される親族(禁婚親)

これについての事例は、姉妹(養女と実娘)の一方(養女)を離縁後に他方(実娘)と縁組の願を差出し、「姉妹之理合茂難相立」と却下された一例⁽¹¹⁰⁾のみで他は良く判らないが、禁婚親については徳川時代の社会通念があり、また当藩法令は幕府法に準じていたと見られるので幕府法と同様ではなかったかと推定する。

註⁽¹¹⁰⁾ 「例書、同」ス

「文化七年 二月廿日

一奥寺金太夫娘千葉久兵衛後妻縁組願差出吟味致候処久兵衛先妻ハ金太夫養女之処致離縁此度金太夫実娘へ縁組願差出候義姉妹之理合茂難相立如可敷と申談候処曾而御番頭よりも問合有之御内分右訳合を以相伺候処談之通如何敷筋故縁組難成義と御達ニ付御番頭江申談願書当役限相返事」幕府法では先妻死亡後、その姉とは再婚できないが妹とは再婚できた。

(3) 婚姻適齢に達し御目見済であること

縁組願出のできる年齢は十五歳である。藩主への御目見以前は縁組願出はできない定めであり、⁽¹¹¹⁾御目見ができるのは十五歳になった時である。⁽¹¹²⁾もつとも縁組願だけは十五歳以前でも許されることがあったが、婚姻は十五歳にならなければ許されなかった。⁽¹¹³⁾

註⁽¹¹¹⁾ 「例書、同」廿九

「文化十五寅正月

一御家中嫡子初而之御目見不相済候得者縁組并見習勤願共ニ難被仰付御規定之処久々御滞府ニ付縁組願差上候様無之至而迷惑之趣……御滞府無之年ニ御下向にも相成候節ハ御規定之通御目見不相済内ハ縁組并見習勤願共ニ御取揚ニ難相成……」

「例書、同」ス

「明和三成 三月二五日

一御家中嫡子縁組御目見前願上候義致遠慮候義……」

(112) 相統法註⁽²¹⁾ 参照

(113) 「例書、同」ス

「寛政十一未八月廿七日

一……一体勤仕御免幼少金差上居候者ニ而も家督之御礼等も相済候義其上假令勤仕御免ニ相成候と乍申縁談一通之義ハ苦ケ間敷尤婚姻等ハ幼少金差上居候程之者相成かたき筋ニ御座候」

(4) 病氣中の縁組の禁止

当主病氣中は本人の養子や縁組はもとより兄弟等の縁組願出も禁

止されたが、明和二年にこの禁令は緩和され、当主についてだけこの制限が残された。⁽¹¹⁴⁾ この規定は病中の当主には当事者能力がないと見なされたとも考えられるが、前記の縁組が済まなければ末期急養子の願出を許さないと言う規制を免れる為に、形式的に縁組を取結ぶことを防止する意図があったのではないか。さらに病中養子願も許さないとすれば未婚の当主の場合はかなり厳しい条件となる訳である。後段の病中養子願は急養子に準じ判元改を行うとしたのはこの禁令を緩和したものと考えられる。兄弟等についての規制の緩和はそれが不合理と考えられたからであろう。

註⁽¹¹⁴⁾ 「例書、巽」ス

「明和二酉 正月七日

一病中縁組養子養女并ニ兄弟等縁組之願不相成候處以来右願勝手次第申出候様被仰付尤其身の縁組は難相成随而病中養子願は急養子之格ニ而判元改被仰付候旨向々江被仰出」

II 婚姻の解消

配偶者の死亡または離縁によって婚姻は解消する。幕府法では夫は妻の病氣あるいは夫婦の不睦（不縁）を理由として妻を離縁でき、離別の際は当事者と当事者双方親類間の熟談を必要とされ、離縁を幕府に届出る事を要した。当藩でも以上については同様であった。⁽¹¹⁵⁾ 幕府法では離別した妻との再婚は禁止されたが、「例書」にはこれについての法令も事例もない。離縁についての事例は極めて少ないので詳しく述べる事はできないが、離縁は家臣間に怨恨を生じ家臣統制上好ま

しい事ではない。したがって妻を四度離別した者の親類が警告を受け、今後離縁した場合には処罰すると申渡された事例がある。⁽¹¹⁶⁾ この事例によっても離縁に際し親族が深く関与していた事が判り、双方親族間の熟談があった事が間接的に推定される。

註⁽¹¹⁵⁾ 例えば離縁之届出について、次の史料がある。

「御用人所例書」、離縁届之事「一右申出候ハ御家老江早速及御届尤御役人以下の隠居并二三男妻ハ常役限承置御席江不申上」

註⁽¹¹⁶⁾ 「例書、同一」ス

「享年三亥 二月十五日

一岩井源五兵衛妻四人迄離別ニ付左之通以御勘定頭親類共へ被仰達

岩井源五兵衛妻四人迄離縁之義不縁とハ乍申畢竟不心得之筋ニも相當候以後離縁等之義有之候ハ御沙汰之筋茂有之候右之趣親類共江内御沙汰被可申達候
右之趣覚書を以御達」

五 むすび

はじめに述べたように武士家族法は家臣統制を主たる目的としていた事は、相続・養子・婚姻の三重要事項がすべて許可制とされていた事に端的に現われている。この事は家臣である武士が封禄に対する任意処分権を喪失し、主君の家臣に対する絶対的支配権が確立された事

に基づくが、武士家族法上の三重要事項を掌握した主君は特に幕藩初期においてこれを有効に行使して家臣統制をはかる事ができた。しかし慣習的な相続保障によって封禄が世禄化し既得権と見なされ、官僚制の確立された當藩では、相続・養子・婚姻に対する主君の任意裁量権は特殊な異例の場合を除いては任意的・恣意的に行使されたとは考えられず、むしろ當藩法令や法的前例或は時によっては幕府法令を根據に行使されたものと見做され、許可の実権は直接各種願届を審査する目付にあり、家老や主君は形式的に許可を与えていたのが実情だったと思われる。

当藩武士家族法は前述したように寛延より以前については史料が乏しく明確な事は判らないが、寛延以降について見れば、当初は幕府法と異なるものも幾らか存在したが、やがて殆んど幕府法に同化された事例も本稿で述べたところであり、幕府法と極めて近似しており、幕府法の改正と連動している法令もある。これは万事江戸之法度に応ずべき事を命じた武家諸法度からすれば当然の事かも知れないが、二代藩主直政が將軍側用人となった事実とも関連があるのではないか。また婚姻法について述べたように、下級武士家族の女子と庶民の婚姻が非公式に認められ、やがて公式に認められるようになったり、下賤の女子を一旦家中武士の養女として形式を整えた上で婚姻する事を禁じた法令の存在等から、身分階層制社会の崩壊現象の一端が感じられ、相続・養子・婚姻に対する主君の許可の権が形式化されていた事とも相まって幕藩期社会の変容、藩官僚制の成熟を察する事ができる。